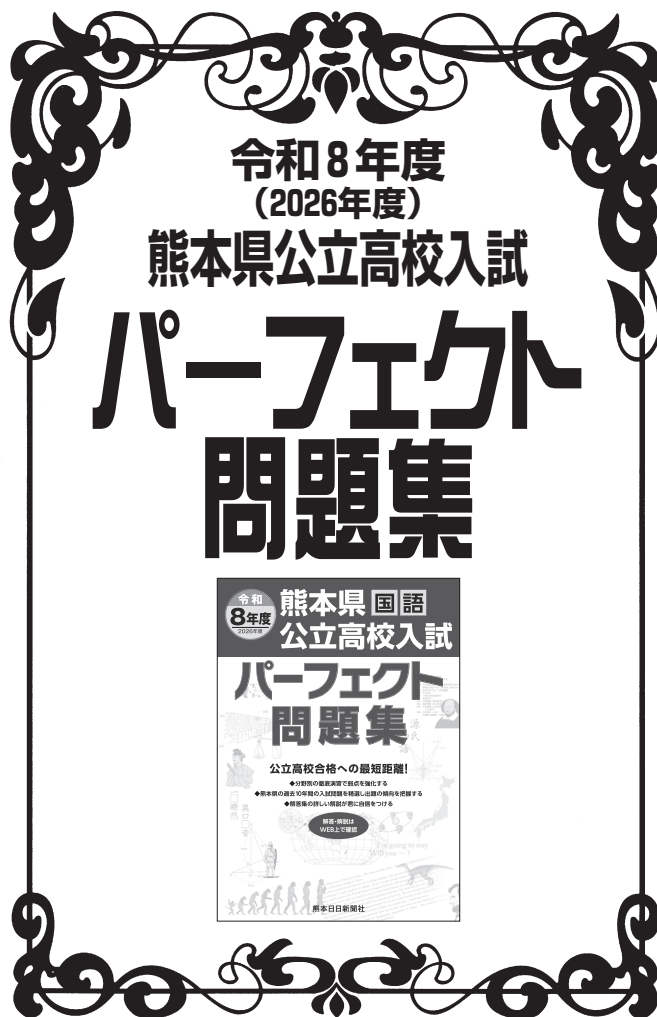




解答例と解説

●熊本ゼミナール教務部 編

第一講座 漢字・語句・文法の知識

P 5 ① 27年度

〈解答〉

- 1 ①密生 ②しの(ばせ) ③拾(い) ④うもう ⑤意外(に)
- 2 (1)そでだけ (2)イ
- 3 オ

〈解説〉

1 ③は「捨てる」という対義語、⑤は「以外(に)」という同音異義語との書き間違いに注意する。

2 (2)札(しめすへん)、複(ころもへん)、税(のぎへん)、枝(きへん)、祝(しめすへん)がそれぞれの部首である。

3 活用形は、傍線部の下に接続することによって判断する。

ア 苦しんで

イ 見つけました

ウ 伝わり(ます)

エ 思い屈した

オ やろう

「ア」「イ」「ウ」に接続→連用形
「エ」「オ」に接続→未然形

P 6 ② 28年度

〈解答〉

- 1 ①たお(して) ②訳 ③けんご ④往来 ⑤垂(れて)
- 2 きかがく
- 3 (活用の種類)サ(行)変格(活用)・(活用形)未然(形)
- 4 四(画目)

〈解説〉

1 ④「往来」とは、道路や通りのことを表す。

3 『活用の種類』について

「し」…言いきりの形「する」↓サ行変格活用は「する」のみ。

☆「移動する」などの「ゝする」も含む
『活用形』について

☆活用形は傍線部の下に接続することによって判断する。

「し」↓「ない」は未然形につづく語である。

4 「成」「感」横棒よりも先に書く。

P 7 ③ 29年度

〈解答〉

- 1 ①お(い) ②熱心(に) ③おお(われて) ④縮(んだり)
- 2 いっせき
- 3 (対)策
- 4 ウ
- 5 立った

〈解説〉

2 「一朝一夕」とはみじかい時間のこと。

4 単語に分けると次のようになる。

さらさらと／流れ／て／い／た

副詞 動詞 助詞 助動詞(過去を表す)

動詞「いる」の連用形

5 「不意に」は品詞で言えば副詞。用言を修飾することばで、ここでは動詞「立った」にかかる。「一文節で抜き出さない。」に注意する。

P 8 ④ 30 年度

△解答△

1 ①げんしゆく ②机 ③へだ(てて) ④勇(んで)

2 就(任)

3 エ

4 「活用の種類」下二段(活用)・「活用形」連体(形)

5 4

△解説△

2 「就任」とは役職につくこと。

3 ア、イ、ウ、オの選択肢は上の漢字が下の漢字を修飾している。

エの選択肢は似た意味の漢字の組み合わせである。

4 ◎活用の種類の識別方法

①サ行変格活用(する、○○する)、カ行変格活用(来る)かを考える。

②「ない」をつける。(今回の問題だと「なしとげない」)

③「ない」の一字前が何段かを確認する。

ア段なら五段活用、イ段なら上一段活用、エ段なら下一段活用。

◎活用形は続く語で判断する。

なしとげること 名詞(体言) ∴体言が続いているので連体形となる。

5 動詞 助動詞 名詞 助詞 名詞 助詞 名詞 助詞 動詞
恐れ／ない／者／の／前／に／道／は／開ける
「打消を表す」

P 9 ⑤ 31 年度

△解答△

1 ①するどい ②にび(った) ③群(れ) ④往復

2 (深山) ゆうこく

3 「Ⅰ」β 「Ⅱ」12

4 「活用の種類」サ行変格(活用)・「活用形」連体(形)

5 イ

△解説△

2 「深山幽谷」とは、ほとんど人が入ったことのないような奥深い自然の地のこと。

3 こざとへんの画数は三画である。「例」を見ると、総画数が算用数字なので、それに合わせて答を書く。

4 「する」「○○する」はサ行変格活用である。また、「する」は「宣教師たち」という体言につながるので連体形となる。

5 イの「人影はない」はものの存在の否定を表す「形容詞」である。形容詞は自立語であるため直前に文節で区切れるが、助動詞は付属語であるため直前で文節で区切れない。

P 10 ⑥ R 2 年度

△解答△

1 ①なか(ば) ②いつい ③向(き) ④夢中

2 利

3 ウ

4 5

5 ア

6 オ

△解説△

3 「深謀遠慮」とは、深く思いを巡らし、遠い先々まで考えること。「深謀」は、奥深い見通しを持った考え、「遠慮」は、ここでは、遠い先のことについて考えを巡らすという意になる。

4 文節に分けると次のようになる。
小説を／読む／友など／一人も／いなかった

5 「最後」は、上の漢字が下の漢字を修飾している熟語。これと同じ構成の熟語はア「親友」である。イ「土地」は似た意味の漢字の組み合わせ、ウ「縦横」は意味が対になる漢字の組み合わせ、エ「閉幕」は上の漢字が動作を、下の漢字が「くを・くに」に当たる意味を表す熟語、オ「日没」は上の漢字が主語、下の漢字が述語の関係となる熟語である。

6 波線オは「くれた」と「た」が後に続いているので連用形である。

△解答▽

- 1 ①おね ②寒(そう) ③(山)並(み) ④中腹
- 2 いちもう
- 3 ウ

4 「活用の種類」力行変格(活用)・「活用形」連用(形)

5 「I」ウ 「II」ひらく

6 4

△解説▽

3 「映」の総画数は九画である。ア～オの漢字をそれぞれ行書体から楷書体に直すと

ア「救(十一画)」

イ「隊(十二画)」

ウ「級(九画)」

エ「徑(八画)」

オ「郷(十一画)」

となる。

4 「来る」は力行変格活用の動詞である。また、二重傍線Bの直後に「た」があることから連用形だと分かる。

5 活用するときに形の変わらない部分を語幹という。それに対し、活用するときに変化する部分を活用語尾という。問題にあるように「ほころびる」は上一段活用なので、活用表にまとめると次のようになる。

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
ほころ	び	び	びる	びる	びれ	びびろ

右の表より、ウ「ほころ・びる」が正解だと分かる。

また、②「花のつばみが…」II。「③「口を」II。」から、

II には「ひらく」が入ることが分かる。

6 「体言」とは名詞のことである。二重傍線部Dの中にある名詞は、上から順に「父」「山」「時」「時間」の四つである。

△解答▽

- 1 ①おだ(やか) ②まんきつ ③簡潔 ④絶(え間)
- 2 一転

3 「活用の種類」下一段(活用)・「活用形」終止(形)

4 「I」イ 「II」ア 「III」キ

5 2

△解説▽

3 「続ける」に「ない」をつけると「続けない」というふうに語尾がエ段になる。よって、この動詞は下一段活用動詞である。また、直後の「と」は引用の格助詞で、終止形に接続する言葉である。

4 問題にもあるように、行書は点画を連続して書くので、楷書に比べ速く文字を書くことができる。また、行書では、点画を省略したり、筆順がかわったりすることもある。

5 活用のある自立語は、動詞、形容詞、形容動詞の三つである。二重傍線Dには「登り(「登る」の連用形)」「考え(「考える」の連用形)」という二つの動詞が含まれている。

P 16 9 R 5年度

△解答▽

1 ①導(く) ②専門 ③じろ(み) ④ぎょうしゅく

2 エ

3 7

4 「活用の種類」サ行変格(活用)・「活用形」連用(形)

5 オ

△解説▽

2 二重傍線部A「杜」の部首は「ネ(しめすへん)」である。「株」の部首は「木(きへん)」、「補」の部首は「ネ(ころもへん)」、「稼」の部首は「禾(のぎへん)」、「粗」の部首は「米(こめへん)」である。

3 二重傍線部Bを文節に分けると「率直に／伝える／著者の／言葉は、／私の／胸に／響きました」となる。

4 二重傍線部C「し」を言い切りの形になおすと「する」となるので、サ行変格活用の動詞だとわかる。また、二重傍線Cの直後に「て」という接続助詞がついていることから、「し」は連用形だとわかる。

5 二重傍線部D「柔軟」は、「柔らかい」「軟らかい」という似た意味を持つ漢字を組み合わせた二字熟語である。「年少」は「年が少ない(幼い)」という意味で、上の字が主語、下の字が述語となっている二字熟語「深海」は「深い海」という意味で、上の字が下の字を修飾している二字熟語である。また、「虚実」は「虚ろ(ないこと・うそ)」「実(あること・本当)」という反対の意味を持つ漢字を組み合わせた二字熟語、「作文」は「文を作る」という意味で、下の字が上の字の目的や対象を表す二字熟語である。

P 18 10 R 6年度

△解答▽

1 (1) ①柱 ②しらぬ(いて) ③印象 ④きょうい

(2) ウ

2 エ

3 オ

4 入り込みます

5 イ

△解説▽

1 (2) 傍線⑤の前の文に伝染病についての記述があること、傍線⑤の直前に「公共」とあることから、ウ「衛生」が最も適当であることがわかる。なお、ア「永世」は限りなく続く時間、永久のこと、イ「永生」は長生きをすること、永遠の命のこと、エ「衛星」は惑星を周囲する天体のことである。

2 「師事(する)」とは、ある人物を先生とし、その人につかえ、教えをうけることである。よって、「事」の意味として最も適当なものはエである。

3 「純」の総画数は十画である。ア「強」は十一画、イ「津」は九画、ウ「教」は十一画、エ「週」は十一画、オ「起」は十画である。

4 「共に」は「あることを一緒にする」という意味で、連用修飾語になる。今回の文では、「入り込みます」という文節を修飾している。

5 それぞれの単語を言い切りの形に直したものに「ない」をつけて、活用の種類を判断する。「ない」をつけて、その直前がア段音になるのは五段活用、イ段音になるのは上一段活用、エ段音になるのは下一段活用である。また、カ行変格活用の動詞は「来る」の一語しかなく、サ行変格活用の動詞は「する」「くする」しかない。なお、波線ア「オ」の動詞はそれぞれ次のようになる。

- ・波線ア「振り返る」＋「ない」＝「振り返らない」↓五段活用
- ・波線イ「生まれる」＋「ない」＝「生まれない」↓下一段活用
- ・波線ウ「守る」＋「ない」＝「守らない」↓五段活用
- ・波線エ「知る」＋「ない」＝「知らない」↓五段活用
- ・波線オ「尽くす」＋「ない」＝「尽くさない」↓五段活用

第二講座 資料の読み取り・文章表現

P 22 ① 27年度

〈解答〉

- 1 (熊本県は九州各県と比較して) 一日一人当たりのごみ排出量は最も少なく、ごみのリサイクル率は第四位だ(という事実がわかる。)
- 2 「I」引き取っていただきます 「II」謙譲語 「III」丁寧語
- 3 ア
- 4 イ

〈解説〉

- 1 資料1には「九州各県の(略)ごみ排出量」「ごみのリサイクル率」が表されているので、この2つの要素それぞれについて書く必要がある。また、表中の数値も着目し「ごみ排出量は最も少ない」「リサイクル率は4位」など、具体的に述べることが望ましい。
- 2 業者の方に対しては「引き取ってもらう」↓「引き取っていただく」という謙譲語をもちいる。また「引き取っていただく」という話を大勢の生徒に伝える場合、聞き手に対する敬意を示す「です」「ます」などの丁寧語を使う。
- 3 選択肢イ「専門的な意見」をもとに資料1が作られたとは言えない。
選択肢ウ「具体的な作業内容」は資料2から読み取ることができない。
選択肢エ「提案の根拠」は資料3から確認できない。
選択肢オ「取り組みの流れ」は資料3から確認できない。
- 4 「提案の全体像」として、取り組み内容が簡潔にまとめられている内容Bを発表する。続けて内容について「提案理由」となるAを述べた上で具体的な作業内容にあたるCを続けたあとで、作業上の注意点となるDを続ける。学校でのプロジェクトなので「家庭」などについて述べているEを最後にする。

P 24 ② 28年度

〈解答〉

- 1 (一文目) 愚公は山の北側のとても険しい場所に住んでいました。
(二文目) (そのため) 愚公は家の出入りのたびに回り道をしなければならませんでした。
- 2 ウ
- 3 やまはかぞうせず
- 4 (どれほど困難なことも) 努力を続ければ実現できる

〈解説〉

- 1 一文目は「険しい場所」という語句が重複するため、省略する。その際、「とても」を書き忘れないように注意する。二文目は主語「愚公は」を書きたすことが必要。また、文末は「でした」と敬体で書いているため、二文ともそろえる必要がある。
- 2 適当でないものを選ぶことに注意する。
ア 二段落目に「故事の内容」、三段落目に「自分の体験」、四段落目に「故事成語と体験との関連」があるので正しい。
イ 三段落目に事実をまじえて体験を話している。
ウ 発表原稿の中に「反論」にあたる部分はないので適当でない。
エ 五段落目に音読する部分、「どんな感じがしますか」と問いかける部分がある。
- オ 問題文冒頭に、「発表のとき黒板に掲示した【資料】と書いてある。
山 不_二加_一増_三 上のように読む。
- 4 立山さんは、愚公と同じように努力を続け、目標のタイムを上回ることができた。B の前に「どれほど困難なことも」とあるので、「困難なことを」「実現できる」や「成し遂げる」などを書く。

△解答▽

- 1 経験
- 2 (この条件に) 当てはまる(人)
- 3 私と違って
- 4 広がる

△解説▽

- 1 中川さんのアドバイスに「中学校生活での」A「をまじえて」とあるので、最初の段落の3行目「経験」が当てはまる。
- 2 岡本さんのアドバイスには「わかりやすい言葉に言い換えたほうがいい」とあるので、「該当する」を「当てはまる」と言い換える。
- 3 坂崎さんは「平井さんが指揮者をしたのか、しなかったのか、わからない」「指揮者をしたことがはっきりわかるように」と言っている。このことをふまえて平井さんが伝えたいのは、「私は指揮者をして、音楽の楽しさを味わえた。」「(みなさんは)私と違って指揮者をしなくても、音楽の楽しさを味わえる。」「この2点である。つまり、立場が違っても楽しさは味わえること」をかけばよいので、「私と違って」と書き換える。
- 4 二段落目からあとの段落に共通する動詞は「広がる」である。
終止形で書きなさいという指示に注意して書く。

△解答▽

- 1 イ
- 2 「A」百年後もきれいな肥後川 「B」軍手 「C」ごみ袋
- 3 肥後新橋周辺には自転車を置く場所がない
- 4 集合時間

△解説▽

- 1 自分の動作に対する敬語表現なので謙譲語である「おくる」を選ぶ。
- 2 A「が合言葉の…」とあるので、…部を目印にボランティア募集のお知らせから似た表現を探す。
B ↓募集のお知らせに、「参加の際は各自で軍手などの準備をお願いします。」とある。ただし、「など」は省いた形で答えること。
- 3 C「は当日もらえる…」とあるので、電話でのやりとりの中から探すと「ゴミ袋」が該当する。
- 3 平田さんの会話の中に「肥後新橋のあたり…場所がないので…」とあるので、そこから字数制限内で書き出しまとめる。
- 4 イベント参加の連絡プリントになるので、最低限集合場所と集合時間を明記する。その観点で考えると集合時間が示されていないことがわかる。

△解答▽

- 1 (一目見ただけで) よくわかります
- 2 嫌いなものが入っている
- 3 苦手なものを残さなくなった。
- 4 私たちができることを考えてみませんか

△解説▽

1 「瞭然」…ははっきりしていて疑いような様子。この意味がわかれば解答は導ける。

2 **A** の直前の「一年生と三年生で差が大きな項目がありますね。」を参考にしてはまる項目を考える。

3 高田さんの会話の中の「苦手なものも残さず食べるようになりました。」の部分から字数制限を満たす解答を作る。

4 **【資料】**に使われている表現を活用していくという視点で考える。最後から2行目に「私たちにできることは何?」という表現があるので、この部分を利用して、字数制限を満たす解答を作る。

5 **【採点の観点】**

○ 内容
問題意識をもつことで行動が変わった自らの体験について、どんな問題意識をもったのか、また、問題意識をもつ前と後でどのように行動が変わったのかにふれながら明確に書いている。

○ 表現
文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○ 表記
漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

○ 解答例
私は新聞の記事で海洋プラスチックごみが海岸の景観を損ねるだけでなく、

生態系や船の航行にも影響を及ぼすことを知り、そのことに問題意識を持つようになった。そして、それまではコンビニで買い物をするときはレジ袋をもらっていたが、自分でもプラスチックごみを減らす工夫をしようと思い、今ではマイバッグを持参して買い物をするようにしている。

1 あさ	2 あず	3 あつ	4 あば	5 いさ	6 いそ
7 いの	8 い	9 うつ	10 うやま	11 うら	12 う
13 お	14 おぎな	15 おさな	16 おさ	17 おとず	18 お
19 およ	20 かき	21 か	22 か	23 きぎ	24 きび
25 こず	26 く	27 こ	28 こ	29 こ	30 こなゆき
31 こま	32 こ	33 さいわ	34 さか	35 さ	36 す
37 そな	38 そ	39 そ	40 た		

△解答▽

- 1 私は高校生の姉に誘われて
- 2 **「A」** 我を忘れる
- 3 **「B」** 試合観戦に熱中している(様子)
- 3 **3 (段落)**
- 4 **E**
- 5 **ウ**

△解説▽

1 〈春田さんへの助言の一部〉の「アドバイス」にある通り、主語を「姉」から春田さん、つまり「私」に変える。その後が続く「誘って」も「誘われて」のように受け身の形に変えることに注意する。

2 **2** 段落にある「我を忘れる」とは「自分の存在を忘れるくらい何かに夢中になるさま」を表す慣用句である。ここでは、代表校同士のハンドボールの試合を観戦していることから、「試合観戦に熱中している」のようにまとめるように。

3 挿入文の内容より、「試合の迫力を感じる」と「以外の競技場の魅力につ

いて書かれてある段落の冒頭に入ることがわかる。**3**段落の1行目に「競技場には、自分で見どころを決める自由もあります。」とあるので、ここに入る

るとわかる。

4 「テレビ観戦はよい」という主張に関して「天候」「交通手段」など具体的に根拠を挙げている。文末が「くからです。」とあるのも解答を導くヒントとなる。

5 「意見」が述べられている段落は**2**段落（競技場観戦よりもテレビ観戦に魅力を感じる）と**4**段落（テレビ中継でいろいろな競技を見よう）である。これが最初と最後に並んでいるものを選ぶ。

P 37	1 たず	2 たね	3 たば	4 た	5 ちぢ	6 つい	7 ぐな
	8 つと	9 つと	10 つね	11 て	12 と	13 とど	14 とな
	15 と	16 なご	17 な	18 に	19 ね	20 のぞ	21 の
	22 はい	23 はぐく	24 はじ	25 はな	26 ひき	27 ひたい	28 ひろ
	29 ふる	30 へ	31 まく	32 まった	33 まど	34 みちび	35 みき
	36 むぎ	37 む	38 む	39 めば	40 も		

P 38
7 R 3 年度

＜解答＞

1 エ

2 筆箱の中身の整理

3 ア

4 (また) 持ち物に書いた名前が薄くなったときは書き直してください。()

＜解説＞

1 直前に「タオル類の合計は」とあるので、【集計結果】をみると、タオル類の落し物は全体の一割に満たないことが分かる。よって、答えは**エ**か**オ**にしばらくは。また、高本さんはその後で「広く落とし物の削減を呼びかけたほうがいい」と述べていることから、タオル類に限らず落し物が多いことに注目していることが分かる。このことから**オ**の「迫る勢いです」は適当ではないことが分かる。

2 提案を受けて【放送原稿】には「皆さんの筆箱は：整理してみませんか」という呼びかけがある。この部分をまとめるとよい。

3 上川さんの発言は「くするのはどうでしょうか」「くどうですか」という形なので、**ア**「提案をしている」が適当である。なお、**イ**は林田さん、**ウ**は高本さん、**エ**は田中さんの様子を説明したものである。

4 【話し合いの様子】には「薄くなった名前の書き直しについてもふれますが」とあるのにも関わらず、【放送原稿】にはこの部分がなくなっていることが分かる。このことから上川さんの「持ち物に書いた名前が薄くなったときには書き直そう」という発言を空所の前後の表現にあうように書き換えるとい

△解答▽

- 1 [A] 4 (番の棚) [B] 0 (番の棚)
2 イ

3 (資料)にある(参考文献を読んでみてください。)

4 (1) 苦しみを伴わない楽しみはない (2) 細部を詳しく(捉えること)

△解説▽

1 永田さんの「確かに肥後六花は六種類の花の総称ですが、熊本独特の花なので」という発言に注目する。植物に関する事なので、肥後六花に関する本は「4 自然科学(植物学・動物学)」に分類されそうではある。しかし、肥後六花が「熊本独特の花」であることから、「O 総記(全集・郷土資料)」に分類されているのである。

2 吉村さんの「私が調べたいのは：『昔の人たちの思い』についてなんです」という発言を受けて、永田さんはその理由をたずねている。この会話の流れにあった説明をしている選択肢はイである。

3 ②の直前の内容から、【資料】中にある何かを使って調べ永田さんは吉村さんに提案したのではないかと推測できる。さらに、「はい。参考文献をたどることで、『昔の人たちの思い』がわかるかもしれませんよ」とも永田さんは発言している。

4 (1) I 直前の「どんなことでも」ということばに注目する。【本の一部】には「どんなことでも苦しみなしで楽しみだけのものがあるでしょうか」とある。「苦しみを伴わない楽しみなどない」といつているのである。

4 (2) 問題にもあるように「全体像を大まかに」の対になる表現を答える。【会話の一部】中には、「全体像」と対になる「細部」、「大まかに」と対になる「詳しく」という言葉がある。

△解答▽

- 1 (1) [I] 環境問題 [II] ごみの削減 [III] 循環型社会
(2) [A] イ [B] ウ

2 行動を変えていく 3 イ

△解説▽

1 (1) それぞれ空所の前後にある表現に注目して、【見学前の話し合い】の中から答えを探すようにする。田中さんの「：環境問題について調べているから：」という発言から、I には「環境問題」が入ることがわかる。また、II の直前にある「食品ロスやプラスチックごみを減らす」は、吉永さんの発言中にある「ごみの削減」を指した取り組みの例である。そして、III の直後に「の実現」とあることから、III は、吉永さんの発言中にある「循環型社会の実現に向けた：」を受けた内容だとわかる。

(2) 「教えていただきたい」の「いただく」は、ここでは「もらう」の謙譲語である。また、「思います」の「ます」は丁寧語である。

2 ②の直後にある後藤さんの「だから私は、今までは捨てていた紙を捨てずに再利用するようにしたよ」という発言に注目する。後藤さんがこのようにしたのは、村上さんの言う「これからの②」という意識を持つたからである。また、後藤さんや松本さんの発言を受けて、「一人ひとりの行動の変化につながるような取り組みを提案しようよ」と村上さんは発言している。このようなやり取りから、後藤さんの「今までは捨てていた紙を、捨てずに再利用するようにしたよ」という発言は、村上さんの言う「行動の変化」の具体例だととらえることができる。

3 田中さんの「五割に満たない項目」という発言、吉永さんの「以前に比べて意識して取り組んでいる人の割合が増えた項目」という発言に注目する。【資料】の中で、二人の発言が当てはまる項目は「マイボトル・マイカップの利用」しかない。この項目に適する取り組みは、イの「水筒の持参を促す取り組み」である。

△解答▽

1 誤った情報

2 6

3 インターネット上でもやってはいけない

4 「A」他者とコミュニケーションを図る

「B」さまざまなことについての情報を得る

△解説▽

1 ① 直後の「拡散する」に注目して、答えを【発表原稿】から探すようにする。「拡散する」は「(あるものが) ひろがる、ちらばる」という意味で、また【発表原稿】の「導入」の部分に「誤った情報の氾濫」とある。「氾濫」には、「(よくないものが) 世間にでまわっている」という意味があるので、このようなことから、①には「誤った情報」が入ることがわかる。

2 池田さんはリスクに対応するための情報モラルを理解するヒントを探すきっかけとなった発言を探す。【話し合いの様子】中、松永さんが「インターネットを安心して使うには、どんなことを注意して利用すればいいのか知りたいな」と発言している。この発言を受けて池田さんはヒントを探そうと思ったのだと推測できる。

3 導入が「インターネットを使う時に気をつけていることは何ですか」という問いかけで始まっていること、③の直前にある「言い換えると」に注目して、前後の内容に当てはまるように解答を作成する。直前の「対面のコミュニケーションでやってはいけないこと」とは「日常モラルを忘れて相手と接すること」であり、それは、インターネットを使う時にも気を付けるべきことだと述べようとしていることをつかむ。

4 A に入るのは、他国の人が思うソーシャルネットを利用するメリットである。【グラフ】を見ると、「新しい友人ができた」「しばらく連絡を取っていなかった人と再び連絡を取ることができるようになった」という二つの項目で、日本と他国との差が大きいことがわかる。【発表原稿】では、この二つの項目内容を「他者とのコミュニケーションを図る」と表現している。

また、B に入るのは日本人が思うソーシャルネットを利用するメリットである。【グラフ】を見ると、日本人は「趣味や身近な地域の話題など、自分が興味のある情報を得ることができた」という項目に最も多く回答していることがわかる。【発表原稿】ではこの項目内容を「さまざまなことについての情報を得る」と表現している。

△採点の観点▽

○内容

インターネットを使うことで、学びが広がったり、深まったりした自らの体験について、インターネットのどのような点が、学びを広げたり、深めたりすることにつながったのかにふれながら明確に書いている。

○表現

文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○表記

漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

△解答例▽

以前、歴史上の人物について調べたことをレポートにまとめる宿題が先生から出されました。その宿題をするためにインターネットを使ったところ、教科書や資料集には載っていないその人物の生い立ちやその人物に関する学説を知ることができました。もちろん情報の真偽を確かめる必要がありますが、インターネットを使って学習すると、より深い学びを得ることができると思います。

第三講座 説明的文章の読解

P 48 ① 25年度

△解答▽

- 1 ①昼行(性) ②視覚
- 2 色彩の効果を決めるのは生物の側
- 3 現代のわれわれが、青空を好ましいと感じ、夕焼けを強烈な刺激と感じること。

4 エ
5 ウ

△解説▽

1 ④段落の最後に「サルも類人猿も『昼行性である。』とある。またその2行前に「彼らは『視覚を発達させた』とある。ここでの彼らはサルと類人猿のこと。」

2 筆者は、昆虫の例をだすことで、「人間と昆虫では、色に対する捉え方が違う」ということを説明しようとしている。

3 直前の「それ」は「(人間にとつて)青空と夕焼けが同じ意味をもっている」を指している。⑤には「青い空は好ましいもの」⑥には「夕焼けは、強烈な刺激」とある。また「したがって」という語にも着目する。

4 線Cの4行前に「青い空の『』というのはいささか変である。」とある。人間のそれぞれの色に対する印象から考えると「不自然」だと筆者が考えていることが分かる。

5 ①：話題の提示

②③⑥：「青色＝好ましいもの」、「夕焼け＝刺激」と人間が捉えるようになった過程

⑦①で提示した「建物の問題点」に対して、筆者がそう思う理由。

P 50 ② 26年度

△解答▽

- 1 ①直線 ②曲線
- 2 人間の強引な、暴力的な侵犯
- 3 エ
- 4 人工物と自然が調和した美しい風景。
- 5 ウ

△解説▽

1 空欄の前後に注目する。①の直前「形づくられている」と、②の直前「なだらかな」は、ともに1行目に出てくる。

2 25～28行目が今昔物語のまとめになっている。人間の侵犯に対して、土着神たちが、抵抗を試みるとある。ここでの人間の侵犯とは、塔を建立することを指している。

3 39～40、44～45行目から作者は、自然と人工は反対語ではないと考えていることが分かる。イは「根拠をはっきりと示す」の部分が誤り。

4 線Cの直前で、自然と人工物が調和すると風景を壊さないと述べているので、この部分を中心にまとめる。また、棚田、水車に加えて、五重塔を例に挙げ、それが山並みに調和している様子を50行目で「美しい風景」と述べている。

5 「現代人は自然への畏怖心を忘れず」は本文33行目「しかし自然への畏怖心は今はない」を受けている部分。また、「自然との共存、気づくべきである」は、39～40行目、44～45行目から読み取る。

△解答▽

- 1 「Ⅰ」転がりにくい 「Ⅱ」握りやすい
- 2 自然の秩序や法則を、球技を通して再確認すること。
- 3 デザインが人の行為の
- 4 オ
- 5 ウ

△解説▽

- 1 設問中の「左右対称で生産性が高い」は19～20行目にあるので、そこに注目して解答を導く。
ただし空欄の下に句点がついているので、語尾を言いかえる必要がある。
- 2 直前の28～29行目にある、「人間は、～してきた」を指しているので、この部分をまとめる。ただし、字数を考え、省く所を考える必要がある。
- 3 線③から、筆者が「球と球技の関係」と「ものと暮らしの関係」に共通項を見出しているように読み取れる。そこで、42行目「球が丸くない」と「同様」に注目して、42～44行目が線③の部分と似ていることに気づくとよい。
- 4 50～51行目から、筆者が柳宗悦氏の着想に、共感していることが分かる。また次の段落が逆接の「しかし」ではじまっていることにも注目する。
- 5 選択肢中の「豊かな～意志を持って」は57～59行目などから、暮らしや～ならない」は2～4行目などから読み取ることができる。

△解説▽

- 1 「Ⅰ」個性 「Ⅱ」ナンバー
- 2 ゾウリムシは滅んでしまい、ヒメゾウリムシは生き残った
- 3 棲む場所とエサが異なることで、生物が競い合うことなく共存すること。
- 4 ア

- 1 空欄の前後の表現を本文中に探す。

Ⅰ 私たち一人ひとりとは特別な(Ⅰ) がある存在

←

(本文) 私たち一人ひとりとは特別な個性がある存在

Ⅱ (Ⅱ) を目指すべきである

←

(本文) ナンバー1を目指さなければ

ナンバー1を目指すべきなのか

- 2 図1を確認するとともに、15行目「ナンバー1しか生きられない。」20行目「共存することができない。」という内容も押さえて、一方は死に絶え、一方だけが生き残るという内容にする。

- 3 傍線部の「これ」は直前の段落を指し、それが答えとなる。まとめを取る

ときは、異なる要素はすべて押さえるようにする。
この段落は、生物によって棲む場所とエサが異なること、それによって競い合うことなく共存していることの二点が述べられていて、あとは具体例である。この二点をまとめる。

- 4 ア 本文最後の文と同じ内容である。

イ 人間は何かを目指すべきだという話を、本文ではしていない。

ウ 弱い生物が強い生物に勝つ、環境に合わせて棲む場所やエサを変えるという内容が本文に合わない。

エ 本文は、ナンバー1であることでオンリー1になるということが述べられており、この選択肢に述べられていることと逆である。

オ 生物が弱い部分を鍛えるという話はない。

△解答▽

- 1 ア
- 2 多層的真理
- 3 「A」関係 [B] 普遍
- 4 オ

△解説▽

- 1 前後の文の関係を読み取る。
(7行目) イノシシやシカ、サルは害獣だ。
(8行目) 村人は異なる視線ももっていた。
(10行目) 動物もまた村に暮らす仲間。
前後は逆の内容なのでア、「ところが」が正解となる。
- 2 傍線②の具体例を一般的な表現でまとめていることは抜き出す。
「動物は、害獣であり、仲間であり、猟の対象であり、尊敬すべきもの」

★「真理」は複数あり、「真理」と「真理」は矛盾した関係にある。

★このような「真理」のあり方を、多層的真理…と呼んでいる。

- 3 A、20～25行目に日本の発想についてまとめている。

- B、27～28行目にヨーロッパの発想についてまとめている。

- 4 (1)・「折り合い」…ゆずりあって、おたがいが納得すること。

(本文47～48行目) (おたがいが) 折れ合って妥協点を探ること。

・「居り合い」…いろいろな真理が共存できること。

この言葉を紹介することで、11段落にある日本の近代化の方向性がこのままでいいのだろうか、と読者に投げかけている。

↓「真理はひとつという欧米流の発想」を指す。

- (2) 【採点の観点】

○ 内容

日常生活の中で「折り合い」をつける上で大切にしたいことについて、筆者の意見にふれながら、自分の考えを明確に書いている。

「複数あらわれる物事のとらえ方を、妥協点を探ってひとつの真理にする(折り合う)のではなく、いろいろな真理が共存できる(居り合う)方法を探っていくべきだ。」

という10段落の内容を(筆者の意見)として触れながら、(折り合いをつける上で大切なこと)を具体例を述べつつ(自分の考え)を書く。
(例)友人と意見が異なった時は、お互いの意見を尊重しながら話し合いをしていくべきだ。

○ 表現

文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○ 表記

漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

○ 解答例

筆者は、「真理」が複数あることを認め、「折り合い」をつける方法を見つけ出そうとする日本の伝統的な考え方について述べている。私は、自分と意見が異なる相手と「折り合い」をつけるために、相手に自分の意見を押付けたり、相手の意見に安易に妥協したりするのはなく、相手を尊重しつつ、納得がいくまで話し合ってお互いが満足できる結論を出すことを心掛けた。

- | | | | | |
|----------|----------|---------|---------|----------|
| 1 いっさい | 2 いふ | 3 いんえい | 4 えいびん | 5 がいりやく |
| 6 かおく | 7 かつさい | 8 かつとう | 9 かんきゅう | 10 かんしょう |
| 11 かんとう | 12 かんゆう | 13 きせき | 14 ぎょうし | 15 きょだく |
| 16 きろ | 17 ぎんみ | 18 くじゅう | 19 けいこく | 20 けいしょう |
| 21 こうおつ | 22 こうけん | 23 してき | 24 しふく | 25 しゅうかく |
| 26 しゅうそく | 27 しょうだく | 28 しんぼく | 29 すいこう | 30 すんか |
| 31 せいよう | 32 せきはい | 33 せつしゅ | 34 せつり | 35 せんりつ |

36 たいよ 37 だんしょう 38 たんれん 39 ちようそ 40 ちよめい

P 60 6 31年度

＜解答＞

1 「I」一人用 「II」洞穴や岩壁

2 I

3 C

4 共同体の構造

5 隣人たちの共有空間から、外の世界と隔絶する場所に変化した。

6 才

＜解説＞

1 空欄前後をよく読み、対応した表現を本文から探す。

1 段落 一文目「…樹上に「一人用のベッドをつくって眠る。」

2 段落 二文目「…洞穴や岩壁など…で寝たのであろう。」

2 傍線②の文を読むと、二次的ベッドは最近になってつくられるようになったものだとわかる。すると、波線Ⅱは「今、私たちが使っているベッド」とあるのでこれが解答だとわかる。他は類人猿のベッドである。

3 脱文の「それ」という指示語に着目する。(C)の前にある「外からの視線を防ぐ壁」が住居の内外を区別する境界の役割を果たすものである。

4 傍線③のある5段落は「たとえば」という接続語が示す通り具体例の段落である。具体例を通して筆者の伝えたい内容は具体例の前後にまとめられている場合が多い。設問より、家の配置が何と関わっているのかを読みとる。直前に「住居と住居の配置は…：共同体の構造を反映していた」とある。

5 8段落の最後の文と9段落の一文目に「住居とは…隣人たちとの共有空間でもあったのだ。それがいつしか…：外の世界と隔絶する場所となった。」とあるのでここをまとめる。「何から何に変化した」とあるので「…から…」に変化した」とまとめる。

6 ア「人類の生物学的な進化の過程」が不適。イ「抽象的な論を具体化し」が不適。ウ 5段落と6段落は家の配置が共同体の構造と関わっていることを示す具体例である。エ「類似する例」が不適。

P 62 7 R 3年度

＜解答＞

1 「I」ことば 「II」美しい

2 意図する指

3 8 (段落)

4 「A」具体的な内容を伝達(する)

「B」ことばという音声素材のもつ美しさを引き出すことによって美の世界を創り出す

＜解説＞

1 I 警官が何のかわりに笛を吹いているのかを本文中から読み取る。2段落に「要するに警官は、ことばで『止れ』とか『行け』と言うかわりに、笛の音を使っているに過ぎず」とある。

II 音楽家が(笛を吹いて)音を出す目的について述べられている部分を探す。8段落に「演奏家は美しい、個性的で創造的な音色を出すために」とある。

2 傍線部②「伝達効率がよく」は警官の笛の音について説明した言葉である。よって、それについて説明している部分を文中から探す。7段落に「これに対し警官の吹く笛の音は…：警官の意図する指示が、簡潔にそして明確に伝わる」とある。ここから「伝達効率がよく」とは「意図する指示が、簡潔にそして明確に伝わる」ということだと分かる。

3 10 11段落の関係に注目する。10段落で自身の主張に合わない内容を述べた上で、「しかし」という逆接の接続詞を使って、11段落の自身の主張につなげている。8段落は「近代の音楽には…：試みもある。しかし全般的に言うならば…」という流れになっており、これは10 11段落と同じ構造である。

4 9段落の「いわゆる詩と称される言語芸術の分野においては…：具体的な内容を伝達するというよりも、むしろ響きのよいことば、美しいことば、快適なリズムなどを駆逐することで、音声による美の世界を創り出すことを主目的としている」とある。ここから、「むしろ」の直前が言語の本来的な機能、

「むしろ」の直後が言語の詩的機能であることが分かる。よって、**A**には「具体的な内容を伝達」が入る。

また、**B**には、「響きのよいことば、美しいことば、快適なリズムなどを駆使すること、音声による美の世界を創り出す」という内容が入るのだが、「響きのよいことば、美しいことば、快適なリズムなど（を駆使する）」は例示なので、本文中の言葉を使って言い換えたほうがよい。**1**段落に「ことば」という音声素材のもつ美しさを、極限まで引き出す努力がなされる」とあるので、この部分を使って「ことば」という音声素材のもつ美しさを引き出す」とするとよい。

5 【採点の観点】

○ 内容

日常の言語生活における詩的機能についての自分の考えを、詩的機能が発揮されている例を一つ取り上げて、明確に書いている。

○ 表現

文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○ 表記

漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

○ 解答例

詩的機能と聞いて私が思いつくものに、商品の広告などで見かける「キャッチコピー」がある。それらは短いフレーズの中で、工夫を凝らしたことば遊びがなされているため、消費者の記憶にも残りやすい。「キャッチコピー」は商品の説明をあまりしていかなくてもかわらず、詩的機能の働きによる印象的な表現で、消費者を惹きつけるという役割を發揮していると思う。

P 65

- | | | | | |
|----------|----------|----------|---------|----------|
| 1 すいい | 2 すいしん | 3 せいさん | 4 せいぞう | 5 ぜっけい |
| 6 せんでん | 7 せんもん | 8 せんちよう | 9 だとう | 10 たんしゆく |
| 11 ちゆうさい | 12 ちようしゃ | 13 つうかい | 14 ていき | 15 ていさい |
| 16 てつきん | 17 てんらん | 18 なつとく | 19 はあく | 20 はいち |
| 21 ばいばい | 22 ばいりつ | 23 はくらん | 24 ひようか | 25 ふくざつ |
| 26 べんご | 27 べんろん | 28 ぼうえき | 29 ほうそう | 30 ほうぼく |
| 31 ほじょ | 32 むちゆう | 33 めんみつ | 34 もけい | 35 ゆうせい |
| 36 ゆうそう | 37 りんき | 38 りんしょう | 39 れきほう | 40 れつきよ |

P 66

8 R 4 年度

＜解答＞

1 「Ⅰ」日常に目 「Ⅱ」模型やCG

2 「a群」ウ 「b群」エ

3 見えない部分を想像し、目の前で起こっているかのように見抜く（ことができるようにする）

4 ア

＜解説＞

1 問題文にもあるように**2**段落中から答えを探すようにする。問題中の表から分かるように、**1・2**段落で、筆者は中学校まで学ぶ「理科」と高校で学ぶ「理科」との違いについて述べている。中学校までの理科で学ぶ対象は「日常目にする物質や現象」であるのに対し、高校でのそれは「日常のスケールから遠く離れた世界」であると筆者は述べている。また、高校では、そのため「模型やCGの助けを借りて、想像と実際の知識を比較する」作業が欠かせないとも述べている。

2 **3**段落で、筆者は「科学」とはどのようなものであるかを、**1・2**段落で述べた「理科」との違いを明確にしながら説明している。このことを説明している選択肢はウである。また、**4**段落の最初に「つまり」とあることから、**4**段落の最初の一文は、**3**段落の要約であることが分かる。このことを説明している選択肢はエである。

3 問題文にもあるように「経験したことがなくても頭の中で追体験できる」理由を答える。

4 段落で、科学を「見えない部分で何が起きているかを想像し、あたかもそれが実際に目の前で起こっているかのように見抜く学問」であると筆者は述べている。「経験したことがなくても頭の中で追体験できる」のは、科学を学ぶことで、「目の前で起こっていない（経験していない）」ことを「想像し、目の前で起こっていることのように見抜く」ことができるからである。

4 段落で、筆者は「科学を学ぶと…物事の仕組みや歴史的繋がりが…社会的関係までも発見することができる」と述べている。要は、科学を学ぶと、自然現象だけでなく人間や社会に関する現象についても知ることができるのである。このことを説明している選択肢はアである。

5 【採点の観点】

○ 内容

「知ることが自分の力になった経験」について、どんなことを知ったのか、また、知ることがどんな力になったのかにふれながら明確に書いている。

○ 表現

文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○ 表記

漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

○ 解答例

私は、周りの人と関わっていく中で自分の性格を知るとは自分の力になると感じている。自分の性格を知ること、自分の長所や短所に気づくことができる。そして、それらを知ることが勉強や対人関係に良い影響を及ぼすこともある。このように、自分の性格を知るとはその人自身の強みになっていくのだと思う。

P 69

- | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1 宛 | 2 鮮 | 3 著 | 4 憩 | 5 傷 | 6 著 | 7 営 | 8 戒 | 9 癒 | 10 祝 | 11 承 |
| 12 潤 | 13 拝 | 14 厳 | 15 穂 | 16 衰 | 17 赴 | 18 卸 | 19 顧 | 20 掲 | 21 抱 | 22 究 |
| 23 極 | 24 企 | 25 凝 | 26 焦 | 27 志 | 28 拒 | 29 週 | 30 支 | 31 論 | 32 好 | 33 優 |

34 健 35 裾 36 迫 37 背 38 添 39 垂 40 巧

P 70 R 5 年度

＜解答＞

1 「Ⅰ」言葉 「Ⅱ」存在の承認

2 ウ

3 他者と自己の生の条件の違いや共通の想いに気づき、自分を客観視できるようにすること。

4 エ

＜解説＞

1 空所の前後に注目して、文章中から答えを探すようにする。「聴く側」のまとめ中にある「Ⅰを通じて想いをキャッチする」は、第一段落にある「言葉を通じて互いの『想い』を受けとめあう」を受けた表現である。また「Ⅱが成立」は、第六段落にある「こうやって、互いの間に存在の承認が成り立つてきます」を受けた表現である。

2 第四段落の最初にある「もちろん」に注目する。ここでは、「もちろん…」。しかし、「…。」という形を使って、自身の考えについて述べていることがわかる。なお、「もちろん」の直後には一般的な内容や自分の考えに対して予想される反論が、「しかし」の直後には筆者の考えがくる。

3 問題文から、答えが「…に気づき、…ができるようになる。」という形になることをつかむ。第八段落に「それぞれ（他者と自分）がどのくらい違った生の条件…を生きてきたかに気づく」「人間としての共通な想い…にも気づいていく」とあることから、問題の言う「気づいたこと」とは、「他者と自分の生の条件の違い」「共通の想い（を持っていること）」の二つだとわかる。また、同じ段落に「自分を客観視できる」とあることから、問題の言う「できること」とは「自分を客観視すること」だとわかる。

4 第十三段落の「どこに向かって生きていけばよいかがはっきりしてきます」第十四段落の「現代は、よき（価値）が曖昧になってきている時代です」などから考える。エはこの二か所をまとめた選択肢だと考えられる。なお、

才の「価値観が多様化する現代」に関する内容は文章中にない。

5 【採点の観点】

○ 内容

「対話」によって得られるものについての自分の考えを、自分の体験や見聞をまじえて明確に書いている。

○ 表現

文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○ 表記

漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

○ 解答例

私は、「対話」によって相手と今以上に良い関係を築くことができると思う。以前、友人とけんかをした。少し時間をおいてから、彼女と話をしたところ、自分の当時の思いが明確になっただけでなく、彼女の思いも理解することができた。今では彼女は無二の親友である。このような経験から、「対話」は自分の思考を振り返りつつ、相互理解を深めることができる機会なのだと思う。

P 74 10 R 6年度

△解答△

1 「I」交わる 「II」外側

2 どんな一人称的な視点からでも、世界の現れ方や、世界への働きかけ方を想像する

3 傍観者のままでは、行動を起こせない

4 Ⅰ

5 Ⅰ

△解説△

1 **I** は「一人称の世界」についてのまとめ中にあるので、それについての記述がある**2**段落に注目する。この段落の最後に「ようするに世界内存在として世界と交わることで……」とあるので、**I** に「交わる」が入ることがわかる。また、**II** は「三人称の世界」についてのまとめ中にあるので、それについての記述がある**3**段落に注目する。この段落の冒頭に「……自分を世界の外に置き、その外側の視点から俯瞰的に眺めた世界である」とあるので、**II** に「外側」が入ることがわかる。

2 「三人称の客観的世界の獲得」とは、どういうことを文章中の言葉を使って説明する。傍線③の直前に「これが」とあり、「これ」は、その直前の「こうして想像のなかで、どんな一人称な視点からでも世界を眺めることができる」を指している。また、三人称の視点から「世界を眺める」とは、「世界がどう立ち現れるか、それにもとづいて世界にどう働きかけるかを想像する」ことである。このようなことから、「三人称の客観的世界の獲得」とは「一人称の視点をもとに、三人称の視点から（どんな一人称の視点からでも）、世界がどう立ち現れるか、それにもとづいて世界にどう働きかけるかを想像できる」ことである。よって、この内容を空所の前後に合うように、指定字数内でまとめるとよい。

3 世界に働きかけるためには「一人称の主観的な世界が必要」である理由について述べている部分を文章の中から探す。**5**段落の最後に「身体でもって世界に働きかけるためには世界のうちに身を置いて、一人称的に世界を把握し

なければならぬ」とあり、ここが理由について述べた部分ではある。しかし、この部分は「十七字で抜き出しなさい」という解答の条件に合わないで、この内容を言い換えた「傍観者のままでは、行動を起こせない（のである）」を解答にする。

4 **5** 段落の冒頭に「このように」とあることから、この段落はそれまでの内容をふまえて、筆者が自身の主張を述べようとしている段落だとわかる。また、「しかも」という接続語を用いて、世界に働きかけるためには一人称の主観的な世界も必要であるということの説明している。よって、このことをふまえた内容になっている**エ**が正解である。なお、**ア**は「具体例を交えながら主題を提起することと読者の興味を引いている」、**イ**は「原因となる事柄を説明／**3**段落で述べられる結果」、**ウ**は「問題を提起している」、**オ**は「筆者の主張の根拠を提示」がそれぞれ間違いである。

5 **6** 段落に「『いま、ここ』から世界を知覚的・情動的に感知し、それにもとづいて世界に働きかける」とあり、「いま、ここ」とは、「一人称の世界」であると**2**段落からわかる。よって、このことをふまえた内容になっている**イ**が正解である。なお、**ア**は「一人称の世界の体験である『感じ（クオリア）』を記憶すること」、**エ**は「三人称の視点をもとにして」が間違いである。また、文章中に**ウ**、**オ**に関する記述はない。

第四講座 文学的文章の読解

P 78 ① 26 年度

＜解答＞

- 1 世界
- 2 男子が知咲にぶつかって、絵が台なしになったから。
- 3 ア
- 4 ウ
- 5 人との関わりで得られる喜びがあることがわかり、人から逃げてきた自分を変えていこうと決意した。

＜解説＞

- 1 デッサンを描いている場面の記述を見て、次の二箇所を押さえる。
○あたしは世界に石膏像と二人きりみたいな気持ちになる。
○世界ができていくのが楽しい。特に、後者は間の文の「□ができていくことがうれしい」と「□部が同じである」。
- 2 原因となったこと、その結果起きたことを、具体的にはつきりと書く。
原因の部分は誰が誰にぶつかったのかを明示する。結果の部分は、「デッサンに思いきり黒い線が生まれてしまった」を元にするが、このままでは「声をあげて怒りたかった」理由がはっきり示されていないので、「絵が台なしになった」とする。
- 3 前後の「やっぱり、ものすごくまっすぐな顔をしている」、「同じようにとは思わなかったけど、まっすぐな顔をしながら」、を押さえ、傍線部と合わせると男の子のまっすぐな姿勢に、自分もまっすぐな態度で応じようとしていること、しかし「目をそらしたくなる」(気後れしている)ことが読み取れる。
- 4 知咲の心の変化が問われているので、変化の前後を示す心情を押さえる。「いつもあたしの周囲を漂っている面倒くささや嫌悪感」から周囲に対するかたくなな態度が読み取れる。
- 5 男の子とのやりとりの後「絵をはめてもらった嬉しさもあることが自分でも意外だった」とあり、「意外だった」の前が、知咲が「わかった」ことである。

これに「人から逃げないようにしたい」という部分を決意として加えてまとめる。

P 80 ② 27 年度

＜解答＞

- 1 ア
- 2 (自分は) いままでといっしょだ
- 3 エ
- 4 自分らしくがんばればそれでいいのだと気づき、ほっとした気持ちになった。
- 5 ひとりひと

＜解説＞

- 1 直後の「の一心」に着目。「の一心」は何かあることをしきりにしたがる様を表す表現、そこまでわからなくても、前後の表現から体育系の部活にこだわる千鶴の心情であることがわかる。その上で、千鶴の会話部分から「変りたい」「いままでとはちがう自分になりたくて」を押さえる。
- 2 1 から千鶴は「変りたい」と思っていることがわかるが、「うんざり」するのは、その反対の状況に関して、「自分はこれまでとおなじレールの上を走りつづけることになる」「いままでのわたしといっしょ」という表現を押さえてまとめる。
- 3 しほりんの会話を確認するとよい。傍線③の「わかるよ、千鶴の気持ち」は、千鶴の思いを受け止め、と対応している。
その2行あとにある会話「あたしも、そんなふうに思うことあるし」は、自分と重ねあわせながら、に対応している。さらに、「でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う」は、自分たちのあるべき姿を率直に語ろう、に対応している。
- 4 「どんなことに気づき」は直前の「千鶴はその言葉を吸いこんだ」に着目する。その言葉とは、その前のしほりんの言葉である。そこで、千鶴が変わるために「千鶴は千鶴らしくがんばればいい」と言われていることを押さえる。

るとよい。

「どんな気持ち」は「肩の力がぬけた」から、不安に対して構えた気持ちから、ほっと安心したことをとらえる。

5 「象徴的に」に注意。千鶴としほりんのことを直接述べたところではなく、象徴として読み取れる部分をさがす。「成長」「音楽」から「ハーモニーを育てていく」を見つけるとよい。

P 82 ③ 28年度

＜解答＞

1 9

2 オ

3 父に影響を受け、将来科学者になりたいと憧れたから。

4 中途半端な

5 ウ

＜解説＞

1 まず、文節に区切ってから単語に分けていく。

「なつて」は動詞「なる」の連用形（促音便）に接続助詞の「て」がついた形。「いた」は動詞「いる」の連用形に過去の助動詞「た」がついた形。

2 5～7行目に注目する。特に「石けんにぐんと興味が広がる」という表現から、石けん作りに対して興味をひかれていることが分かる。

3 23～35行目にあるマチの問いに対する奏人の答えに注目する。小さい頃、父親を科学者だと思っていて、その父親に影響を受けたこと、本人も科学者になりたいという憧れがあることが書かれている。

4 36～39行目に注目する。奏人との会話を通して、自分が中途半端な気持ちで科学部に入ってしまったことを反省しているのが分かる。

5 直前の「それが、とても楽しい」に注目する。「それ」は41～42行目の「今日からは、気になるはずだ」を指しており、以前とは違ったものの見方ができると、マチが感じていることが分かる。

P 84 ④ 29年度

＜解答＞

1 にしがみついていた。

2 妹を憎らしく思う気持ち。

3 おねえちゃん

4 姉という自分の立場を生きていこうと思うようになった。

5 オ

6 イ

＜解説＞

1 ここで言うできごととは、幼い頃の蟬に関する思い出を指している。

5行目の「その日も」から始まり、18行目「うていた。」までが思い出の内容である。

2 22行目に「一言でいえば、憎らしくてたまらなかったの」に注目する。妹を大事にしなければならぬことを理屈では分かっていた反面、妹を憎らしく思う気持ちがあることが分かる。

3 28～30行目から、このとき姉のことを何度も呼んでいたことが分かる。また、64行目から「私」は姉のことを「おねえちゃん」と呼んでいることが分かる。

4 40～41行目で「生きて行くってことはいろんな立場を生きて行くってことだろう」と姉が言っていることに注目する。また、25行目に「姉妹なんだって、理屈でなく分かったの」とも言っている、この2つの部分から、（妹に対する）姉という立場を気持ちの部分で受け入れられたことが分かる。

5 ここでの「鎧」は「私」と姉の心が触れ合うことを遮る障壁のようなものをたとえている。

ア 「幼く」「反発」 イ 「気まぐれな愛情表現」 ウ 「恨み」「不信感」

エ 「口下手」が本文から読み取れない。

6 「奔流」とは、勢いのある激しい流れのこと。ここでは、姉に対する様々な思いが一気にあふれている様子を表している。

△解答△

- 1 特産物と観光
- 2 今時の女の
- 3 ゆきの感情的な言動が原因で取材が台無しになってしまったこと。
- 4 イ
- 5 エ

△解説△

- 1 何をアピールすることに繋がっているのかを読みとる。
4行目に「販売促進だけじゃなく、観光にも繋がっていた」とあるので、ここを六字でまとめている部分を探す。また、24行目に「特産物と観光を上手に絡めてアピールした」とある。
- 2 33～34行目、38行目のセリフより、女性リポーターは、単なる流行り（ブーム）でゆきが農業を行っていると思っていることが読みとれる。このこと同じ内容で□に当てはまる部分を探す。すると、56行目の「一時の感情でやっている」が見つかる。
- 3 36～37行目、39～40行目に注目する。
むきになってリポーターに反論しているところから、感情的になっているゆきの様子が読みとれる。これにより、その場の空気が重くなり、撮影がストップしている。また、どうなってしまったかについては、50行目に「せっかくの取材、台無しにしましたね」とあるので、ここをまとめるとよい。
- 4 ここまでの流れを読み取る。自分のせいで取材を台無しにしてしまい、その上女将にまで謝られたことで、その場に居づらくなっていることが読みとれる。それぞれの語句の意見は次のとおり。
ア：気にしない。 イ：その場にじっとしてられない。
エ：逆らえない。 オ：納得できない。
- 5 説明として「適当でないもの」を選ぶ問題なので注意する。本文の61行目「65行目の内容をふまえて考えると、エの「取材のときの失敗を取り戻そうと」という部分が不適。

- | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|
| 1 訪 | 2 携 | 3 漂 | 4 手綱 | 5 盛 | 6 黙 | 7 告 | 8 継 | 9 就 | 10 支 |
| 11 繕 | 12 慎 | 13 募 | 14 潰 | 15 滯 | 16 萎 | 17 半 | 18 眺 | 19 怠 | 20 滑 |
| 21 苦笑 | 22 濁 | 23 拭 | 24 映 | 25 弾 | 26 省 | 27 浸 | 28 膨 | 29 隔 | 30 干 |
| 31 朗 | 32 誇 | 33 綻 | 34 賄 | 35 貪 | 36 専 | 37 催 | 38 緩 | 39 弱音 | 40 湧 |

△解答△

- 1 緊張感がほぐれた
- 2 ア
- 3 ウ
- 4 調和がとれていることを感じ取り、金賞を獲得できたと確信した。
- 5 学校はなくなっても互いに励まし合った仲間との友情は変わらないということ。
- 6 イ

△解説△

- 1 肩の力が抜ける（慣用句）とは、「緊張が解ける」の意味。
本文中から、誰かが緊張している場面やそれがほぐれる場面を探す。
- 2 ・大輝は仲間を励まそうという気持ちを持っている。（リード文の最後の部分）
・大輝は自分のこの発言について「こんな時（みんなが緊張している時）だからいいのさ」（27行目）と述べている。
・大輝のこの発言によってみんなの緊張感がほぐれている。（30行目）
以上から、アが正解。
- 3 直後の一文に「しっかり歌いこんだ成果で、どちらも声に力みがない。」とあるので、歌声に対してプラスに評価している選択肢を選ぶ。ア、イはあてはまらない。
- 4 エ「悠々と勇ましい」が女子の声を表現するのに不適切。
オ「我先に」が合唱に不適切。
（雄太郎が確信した結果）

雄太郎たちが求めている結果は、リード文より「金賞を獲得」することである。

〈雄太郎が感じ取ったもの〉

雄太郎たちを金賞へ導くものは何かを考えると、45行目の「調和のとれた合唱」だとよみとれる。

5 雄太郎の思いが書かれている所を探す。

58行目の「歌声にのって」から65行目「ほんとうによかった。」までの部分に着目する。

・歌声を聞いて感動しているので歌詞にも注目する。「いつも君がそばにいて」、「今君と一緒に」に着目する。

以上より、解答の中心は61行目の「学校はなくなってもぼくたちの友情は変わらない」の部分である。

6 真由美が「小学生のような返事をした」のは、28行目「ふいに名前を呼ばれて跳び上がりそうになった」(驚いた)からである。よってイの解釈が合っていない。

P 93

- | | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|-------|--------|
| 1 善・悪 | 2 一髪 | 3 承転 | 4 疑心 | 5 天外 | 6 怒哀 |
| 7 依然 | 8 前・後 | 9 厚顔 | 10 無援 | 11 霧中 | 12 道断 |
| 13 四・八 | 14 錯誤 | 15 自業 | 16 自答 | 17 縦横 | 18 捨・扱 |
| 19 尾・貫 | 20 離・裂 | 21 機・転 | 22 針小 | 23 未踏 | |
| 24 雨読 | 25 体・命 | 26 千・万 | 27 未聞 | 28 晚成 | |
| 29 同・異 | 30 单刀 | 31 三・四 | 32 黙考 | 33 適所 | |
| 34 天衣 | 35 東・西 | 36 船・馬 | | | |

P 94

7 R 2年度

△解答▽

1 「Ⅰ」九分三八秒 「Ⅱ」九分

2 九分という中途半端な時間が、圭祐の体に刻みこまれていること。

3 ア

4 きつと、他の分野でも充分に生かせる

5 イ

6 希望や期待もなく無意味な時間を過ごす想像していた高校生活に対して、興味を感じ始めた。

△解説▽

1 IもIIも時間が入ることは明らかである。

Iは、表の上に「中学二年 春」とあるので、本文の「二年生の春の大会で、九分三八秒」が見つけられる。

IIは、前後に「目標」「以内」とあるのを手がかりに「九分を切ることを目標に」や「九分以内とは：過去の目標タイム」という部分を見つけることができる。

2 傍線②の正也の発言に対して、圭祐自身が「何が？」と問い返している。それに対する正也の返答「九分っていう…ってことだろ」が答えとして該当する部分となる。

3 「心の琴線に触れる」とは、物事が人を感動させたり共感させたりすることを意味する表現である。この意味を知らなくても、正也が圭祐のことを繰り返し返す「すごい」と言っていることを押さえられれば、アが正解だとわかる。

4 空欄を含む「」の部分には、「正也の主張」と問いに書いてあるので、傍線部より前で、正也が圭祐について述べているところを見ると、「一つの分野として、研究を重ねて完成されたもの(圭祐が培ってきたもの)だろうから、きつと、他の分野でも充分に生かせる」とある。

5 傍線部直前に「そういうこととされる方が嫌だろうなって思っ」て」とある。この部分が設問の「圭祐を不快にさせると判断して」に当たるので、「そういうこと」が指す内容を直前から読み取り、それと一致する答えを選ぶ。

6 心情変化を問われているので、正也とやりとりをする前と後でどのように圭祐の考えが変わったのか、指定語句をヒントにして該当部分を探す。

「高校生活」に対しては、希望や期待を中学時代に置いたまま、時間だけが無意味に過ぎていくような三年間を送ることしか想像できなかった。」の部分がやりとり前の心情、「興味を持てるかどうかは自信がないけれど、それを考えるのはあとでもいい。」の部分がやりとりを通して変化した心情なの

で、この部分をまとめる。

P 97	1 運営	2 衛星	3 沿岸	4 演奏	5 恩恵	6 温厚	7 格言	8 拡散
	9 拡張	10 寒暖	11 看板	12 喜劇	13 汽笛	14 急激	15 協議	16 郷里
	17 勤務	18 警護	19 権益	20 見聞	21 減量	22 孝行	23 口座	24 功績
	25 候補	26 穀物	27 根幹	28 混雑	29 財産	30 飼育	31 支給	32 至急
	33 磁針	34 辞退	35 辞典	36 車窓	37 就職	38 収容	39 縮尺	40 浸透

P 98 8 R 3 年度

△解答▽

1 イ

2 幸との合奏

3 廉太郎のピアノの音色が変わったことに気づき、廉太郎の技術が上達したことを感じ取ったから。

4 「A」オ 「B」(幸に) 音楽への情熱(が戻った様子)

5 エ

△解説▽

1 「舌を巻く」は「あまりにもすぐれていることに対して」ひどく驚く・驚嘆する」という意味である。

2 「長いようで短い旅の末、最後の一言に至った時には」とあるので、「長いようで短い旅」とは二人で行った合奏のことだと分かる。また、「廉太郎は…合奏を申し出た」という説明から本文が始まっているので、本文のはじめから傍線②の直前までは、二人の合奏の様子やそのさなかに廉太郎が感じたことを述べた場面である。加えて、答えには、廉太郎が誰と合奏をしているのかを明記する。

3 問題には「演奏の途中でどんなことに気づき、どんなことを感じ取ったからか」とあるので、「(演奏の途中で) …に気づき、…を感じ取った」という形になるように解答をまとめるとよい。また、指定語として「音色」が与えられているので、これを手掛かりに解答をつくとよい。

傍線③の直前の「あなた、この演奏の途中で、腕を上げたんじゃない?」という発言から、幸は「廉太郎の演奏が上達したことを感じ取ったことが分かる。また、文章中に「廉太郎のピアノが音色を変えた。…」とある。幸はこのことに気づいたので、廉太郎の演奏が上達したことを感じ取ったのである。なお、「腕を上げる」は慣用句なので、答えにする際には言い換えたほうがよい。

4 A 延の性格を答える問題であることに注意する。問題の表中の、「持ち主」の性格を反映してか四角四面で硬質な音質を持つ」から分かるように、「持ち主」は延である。ここから「厳格な態度」という言葉が適していることが分かる。なお、エ「冷淡な口調」は日ごろの幸についての説明であって、延についての説明ではない。

B 合奏が始まってから終わるまでの幸の様子をまとめると、次のようになる。

「幸のバイオリンは精彩を欠いていた」

「幸の目は依然として輝かない」

「廉太郎の放つ音に無意識に反応している」

新聞に書き立てられたことが原因で、音楽に気持ちが向いていない。

廉太郎のピアノの音色が変わる。

「幸の演奏にも力が戻ってきた」

「幸の目に…光が戻ってきた」

「(幸の) 顔はわずかに上気している」

幸の演奏が熱を帯びる(音楽に気持ちが向いている)。

「上気する」は「暑かったり興奮したりして顔がはてる」という意味で、ここでは幸が演奏に熱を入れている様子を表現している。ここから、幸が音楽に対して(再び)前向きに取り組めるようになったことが分かる。また、傍線②の5行前に「これこそが本来の幸田幸だ。共に曲を形作る仲間すらも追い立て、焼き尽くす」とある。ここから、本来、幸は情熱をもって音楽に取り組む人物であるということが分かる。

5 本文中の「今も壁にぶつかって悩んでいる…右手が弱いという問題はまるで解決していない」から、以前から抱えていた課題をまだ克服していないと

いう思いが廉太郎にあることが分かる。そのうえで、傍線⑤「：僕も頑張らなくちゃなりません」と廉太郎は発言したのである。この発言から自分の課題を克服することを改めて決意している廉太郎の様子を読み取ることができ、このことを説明しているのはⅡである。なお、Ⅲは「幸の才能を妬む気持ちによって自分が成長してきた」という部分を本文から読み取ることができない。自分が成長できたのは「幸が壁であり続けてくれた」からだと言え、考えている。「幸の才能を妬んだこと」が成長できた原因ではない。

P 101

- | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 陳列 | 2 添削 | 3 踏襲 | 4 陶醉 | 5 吐露 | 6 徒勞 | 7 拝謁 | 8 拝借 |
| 9 剥離 | 10 破綻 | 11 破竹 | 12 煩雜 | 13 搬出 | 14 晚鐘 | 15 繁茂 | 16 汎用 |
| 17 批准 | 18 罷免 | 19 便乘 | 20 頻繁 | 21 封筒 | 22 布巾 | 23 沸騰 | 24 富裕 |
| 25 紛糾 | 26 便宜 | 27 返却 | 28 芳香 | 29 膨張 | 30 沒頭 | 31 矛盾 | 32 摸索 |
| 33 勇敢 | 34 誘致 | 35 愉快 | 36 余韻 | 37 抑揚 | 38 隆盛 | 39 履歷 | 40 廉価 |

P 102

9 R 4 年度

△解答▽

- 1 イ
- 2 ウ
- 3 「Ⅰ」農家の朝は「Ⅱ」あせる
- 4 茂三は、雪乃が寝坊したことに對して、怒ったりあきれたりしては
いないということ。
- 5 (自分は) 目標を半分は達成できたのだから自信を持つていいのだと納得
する(様子)

△解説▽

- 1 雪乃が「心臓が硬くなる思いがした」のは、直前で伝えられた茂三の発言に気づかされたことがあったからである。「はっとする」には「我に返る・驚く」などの意味がある。なお、ウ「ぞっとした」、オ「ぎょっとした」は言い過ぎである。

- 2 直前のヨシ江の発言に注目する。「そんなにまっくらけえして行かんでも

大丈夫(そんなに慌てて行かなくても大丈夫)」と言っている。このことを説明している選択肢はⅢである。

3

Ⅰには雪乃を感じ取ったこと、Ⅱにはこのときの雪乃の気持ちが入る。問題中のまともにもあるように、雪乃は納屋に明かりがついているのを見たり、トラクターの音を聞いたりしたのである。これから「農家の朝(農作業)」はとくに始まっている」ことを感じ取ったのである。また、「寝坊したために作業に遅れてしまった」という自覚のある雪乃は、それを感じ取ったとき「あせった」はずである。

4

それまでの内容を整理したうえで問題を考えるようにする。

○雪乃：寝坊して農作業に遅れてしまったことに對して、茂三が「怒っているのではないか、あきれているのではないか」という不安。

← 茂三が雪乃に笑顔で「寝ぼすけめ」と声をかける。

○雪乃：胸のつかえがとれ、楽になっていく。

要は、自分が寝坊したことに對して、茂三は怒ったり、あきれたりしていないことが分かり、雪乃ははっとしたのである。

5

雪乃が直前の茂三の言葉に「頷いて」いることから考える。雪乃は茂三の言葉を「目標の半分は達成できた」という意味だと捉えており、この言葉に納得できたから彼女は「頷いた」のである。

△解答△

1 ア

2 ずっと冷めていた

3 すごくよかったです

4 目立たない楽器であっても、大切な役割をになっていることに誇りを持っている。

5 オ

6 (ソフトボールのエースでなくても)自分が自分の人生の主役なのであり、トレーナーとしてのエースを目指せばよいということ。

△解説△

1 「似ても似つかない」は「全く似ていない(まったく違う)」という意味である。イ「あまり似ていない」は、「まったく(全然)ゝない」という意味をふくんでいないので誤りである。なお、オ「似つかわしい」は「(その人に)ちようどよい」「ふさわしい」という意味である。

2 答えるのは「久保塚さんの演奏を聴くまでの早希の心の状態」なので、注意する。14行目に「ずっと冷めていた私の心も、身体も、熱くなった」とある。「ずっと冷めていた」が演奏を聴くまでの早希の心の状態、「熱くなった」が演奏を聴いたときの早希の心の状態である。

3 ③の直後にある「三度目の台詞だったけれど」や、直後の「『はは、ありがとう……』』という久保塚の発言に注目する。19～20行目に「『すごくよかったです』／席に着くなり、さっきと同じ台詞を私は繰り返し返した。」とある。早希の「『すごくよかったです』』という言葉に対して、「『はは、ありがとう』』と久保塚は返したのである。

4 傍線部④中の「屋台骨」や、問題のまとめ中にある「主役になれないことに不満を感じている」に注目して、久保塚の思いを推察する。「屋台骨」とは元来「家を構成する柱」などを指す言葉であるが、そこから転じて「組織を支える中心となるもの／組織を支える重要なもの」といった意味でも用いられる。このことから、久保塚は「なかなか主役にはなれないものの、

トロンボーンはオーケストラを支えるための重要な役割を果たしている」という自負を持っているのではないかと推察することができる。このことをふまえた上で、早希の「不満に感じている」という思いと対になるような久保塚の思いを推察するとよい。

5 傍線部⑥中の「きょとんと(する)」とは「その場のことがのみこめないため、目をまるくしてぼんやりとすること」である。また同じ傍線部中の「小さくうなずいた」は直前の早希の発言に対する反応である。これらのことから正解がオだとわかる。ア～エの選択肢中には「きょとんと」の説明になっている表現がない。

6 傍線部⑦中の「こんな」が、直前の「いつまでもエースにこだわら私は、混同していたのか。……トレーナーとしてのエースをねらえばいいのではないか。」の部分の指していることに注目する。また、「こんな簡単なこと」に気づききっかけとなった久保塚の発言にも注目する。この直前、久保塚は「混同してるよ」／「トロンボーンと僕の人生を」／「トロンボーンという楽器がオーケストラの主役にはなりにくいからといって、僕が僕の人生の主役でないわけではない」と発言している。この発言を受けて、早希は「エースピッチャーとしてチームの主役であったこと」と「自分の人生」を混同していることに気づき、そのうえで「ソフトボールのエースでなくても、自分が自分の人生の主役なのだから、(そうだったことに対するこだわりを捨てて)今度はトレーナーとしてのエースをねらおう」という思いに至ったのである。

第五講座 古典の読解

P 111 ① 27年度

〈解答〉

- 1 あじわい
- 2 工
- 3 塩を添へたる湯漬
- 4 思いがけず得た感動を再び味わうのは難しいという共通点。

〈解説〉

- 1 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。
- 2 「思ひまうけて」(期待して)と、直後にある「はからずして」(何も考えず)が対応していることに気づくこと。また、その後にある、「うまきは思ひよらざる所にあり」という文もヒントになる。
- 3 「粗食」とは粗末な食べ物のこと。具体例を尋ねられているので具体的な食べ物の名前をさがす。「湯漬け」とはお茶漬けのように、ご飯に湯をかけたもの。
- 4 「感動」が思いがけないものであること、その「感動」を再現するのはむずかしいということ、の二点をおさえること。

〈大意〉

人にもてなされた食べ物をおいしいと思ひ、それを家で作つて食べると、外で食べたときよりおいしくはない。なぜならば(それは)家では(うまいはずだ)と期待して食べるからである。食べ物は、何も考えず(期待せずに)食べるものにおいしさがある。だから、粗末な食べ物といへど、おいしさは思いがけないところにある。また、その時と場所と、自分のお腹のようすにぴったりとあてはまり、口になうものよりおいしい物は決してない。塩を添えた湯漬けであっても、空腹の時は、山海の珍味よりもおいしいものだ。絵の道も同じである。初めに(絵を)画いたように(かこう)と思つても、それを写し出し(初めの)絵のすばらしさ、筆の勢い、墨の色すべてにおいて、前と同じようにはならず、ふたたびまねることができるとどめつたにないことである。

P 112 ② 28年度

〈解答〉

- 1 あらそう
- 2 才
- 3 (1) 「A」エ 「B」ア
- 4 (2) 売る人の言うとおりの値段で品物を買っていた。
新右衛門の温情に応えたいという気持ち。

〈解説〉

- 1 語頭を除き、「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。
- 2 傍線部を含む一文に注目する。「商人はみな同じで、物の値段のかけひきをするのが世の常なのに、どうしてこのように言われるままになさるのか。」とある。傍線部はその直後の内容を表していると読み取れるので、同じ内容を述べている才が正解となる。
- 3 (1) 直前の新右衛門のセリフから考える。新右衛門は売る人たちのことを「日ごと」に重きを(略)いふべくもあらじ」、自分ら商人のことを『おのれらは(略)家業を営む』と述べている。この箇所と同じ内容を表す選択肢を選ぶ。
(2) 3～4行目の、家内の者のセリフから『言われるままにされるのか(応じるのか)』とある。注意点として8～9行目にも同じようなことが述べられているが、こちらにはその行動の理由も併せて述べられていること。設問は「していたこと」を尋ねているので、その行動の理由は含まれない。
- 4 「どんな気持ち(を略)」と問われているので、答えは「うな気持ち」と答える。その上で、傍線部の直前に注目する。『新右衛門が情けある』とは、つまり『(売る者に対して)新右衛門が温情を持って(商売して)いる』ということであり、そのことを知った売る者も、その気持ちに報いようと値を安くしたのである。

△解答▽

1 ウ

2 (1) 我に還せ

(2) 井戸の中の子どもに取られた

3 井戸の中の子ども

4 子どもだけでなく父までも、井戸の水面に映った自分の姿を他人だと思つて抗議した点。

△解説▽

1 訓読点は漢文に用いられている語の、左下に付けて使う。今回の問題は「毬子を弄び」の順に読める訓読点を用いた文を探す。「レ点」は、直後の一字を読んでは「レ点が付いている一字を読む」という決まりがあるので、ウ以外の訓読点の使い方では、問題文の通りの語順ではなくなってしまう。

2 (1) 傍線②に「曰はく(『言つた』)」と書かれており、その直後に言ったことが書かれている。古文の文中に出てくる会話文には「」が使われていないこともある。古文の場合、会話文の終わりには「と」が用いられることが多いので、会話文を探す手がかりになる。

(2) 問題文にある「毬子を」に注目する。古文中では助詞が省略されていますが、3行目に「毬子(を) 井中の児に取らる」と書かれてあることが読み取れば、泣いている理由として、この部分を答えに用いることが分かる。

3 直前に「父が井戸の中をのぞいた」ことが書かれているので、「井戸の中(の水)に映った自分の姿」が見えているはず。しかし、直後の内容から父も自分の姿を井戸の中にいる誰かだと勘違いしていることが読み取れるので、父としては「井戸の中にいる子ども」の「親」に対して言っているということになる。

4 子どもが勘違いしている点でも笑いを誘うが、大人である親まで勘違いしているところが、この古文の愉快なところである。

△現代語訳▽

ある子どもが毬子(けし)を(蹴って)遊んでいると、偶然に蹴って井戸に落としてしまった。すぐにうつぶせて井戸(の中)を見て、(井戸の水に映った)影(『姿』)に向かって「私に(毬子)返して」と言った。父が(泣いている)子どもに(理由を)尋ねると、「毬子を井戸の中の子どもに取られた」と(子どもが)訴えて言った。父も井戸をのぞき込み、自分の(映っている)影(『姿』)を見て「おまえのうちの子どもが(私の)子どもの毬子を蹴り(『使つて遊び』)たがっているが、うちの子はやりたがっていないとでもいうのか(『うちの子も遊びたがっているのだから返してくれ』)」と言った。

P 115
4 30年度

〈解答〉

1 いいあえり

2 (1) 士

(2) 杖が折れて、猪が倒れた。

3 (1) 士が、たいした腕前でもなさそうなのに剣術を教えていること。

(2) ウ

〈解説〉

1 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」になおす。二ヶ所あることに注意。

2 (1) 杖で猪を打ったのが誰なのかを考える。「一字で」と問われていることに注意。

(2) 直後の文章の内容を押さえること。「杖が折れたこと」を「猪が倒れたこと」の二つの内容が必要。

3 (1) 傍線部③と2行目の「人」が同じと考えられるので、その「人」が言った言葉をふまえて答えを作る。

(2) 直後の「一年来の習練むなしからざる」に着目し、習練を続けることの大切さを感じていることをとらえる。

〈大意〉

剣術を教えて生活をしている士(武士)がいた。年をとっていたので、たいした腕前でもない、人々は言いあつた。あるとき、その士が朝早く起きて、門にたたずんでいると、偶然荒猪が駆けて来た。逃げられそうもなかったので、持っている杖で一度打つと、杖は細かったので二つに折れ、猪は倒れた。このことを聞いて、日頃納得がいけない者も、今、このように老いていたとしても、長年の習練が無駄ではないことを感じたということである。

P 116
5 31年度

〈解答〉

1 ゆえ

2 息子が狼に襲われること。

3 ア

4 (1) 「A」ウ「B」オ

(2) 息子の親を大切に思う心

〈解説〉

1 「ゑ」は古文特有のかな。「ゐ↓い」とともに覚える。

2 線②の直前にある「定めて狼に襲はれん」を押さえる。「息子が」も入れる。

3 「子の行きしと思ふ辺りへ落ちかかりたると見えて」を押さえる。雷が子どもの向かったところに落ちたのでは、とあわてている。

4 (1) AとBはともに災難であること、「AがBに退治されて」という部分ヒントを考える。

(2) Cの直後にある、「くが命拾いにつながったと考えて、『孝童』という^レ」をふまえる。〈大意〉を参照すること。

〈大意〉

この百姓が木陰で雨をしのいでいたところ、自分の子が来たので、とても驚いて、食事(弁当)をうけとった。雨もあがり日も暮れそうになったので、「すぐ帰りなさい」と言うと、子は「早く終わらせて下さい」と言つて、先に帰った。(すると)狼が出て息子の後をつけて野道を行つてのを見て、親は大変驚き、「きつと狼に襲われるだろう」と心配で落ち着いていられなかった。再び嫌いな雷が響くやいなや、子が行ったと思われるところへ落ちたと見えて(親は)農具を捨ててそこに行くと、子はおらず、狼が倒れていた。「きつと子も(雷に)打たれたのだろう」と、急いで宿に帰ると、子は無事でいたとのことだ。

△解答▽

- 1 きょう
- 2 オ
- 3 エ
- 4 (母に) 時鳥の初音を聞かせたい
- 5 家づとになりしことこそうれしけれ親も待たれし初時鳥

△解説▽

- 1 ① 「けふ」→「けう」(語頭以外の「ハ行」は「ワ行」に直す。
② 「けう (keu)」→「きょう (kyo)」
- 2 ア・エの主語は唐磨、オの主語は母親である。
- 3 〈大意〉参照。時鳥の初音を母親へのみやげにしたいが「かひなくて(ど
うしようもなくて)」、と残念な思いを伝える。
- 4 空欄下の「願ひながら果たせなかつた」という部分が本文「思ひたれど、
かひなくて」に当たるので、その直前の内容をまとめる。
- 5 初めに詠んだ短歌の上の句「家づとにならぬばかりぞ恨みなる」の部分で、
「家づとになりしことこそうれしけれ」と詠み直している。

△大意▽

錦織唐磨は、幼い時、よそに行つて帰る時、ある山里を通つた。夏の初めて
あつたので、ほととぎすの初音を聞いて、

家へのみやげにならないのがうらめしい、親もまっているであろうほとと
ぎすの初音

とよんだ。そして家に帰つて母の前に来て、「今日ほととぎすの初音を聞きま
したので、家へのみやげになるのであれば、母上もたいへんお喜びになると思つ
たのですが、しかたがなくて、ただこのような歌をよんで帰りました」と唐磨
が言つたところ、母は(それを)聞いて、「ほととぎすの初音を聞くのよりは、
おまえがよんでくれた歌を聞くのがうれしい気持ちになりますよ」とおっしゃつ
た。ちょうどその時、空でほととぎすが鳴いたので、母といっしょに、「あら
鳴いたよ」と言つたので、唐磨はとりあえず、

家へのみやげになったのはうれしい
と上の句を直した。

△解答▽

- 1 日和見
- 2 ア
- 3 天候を見誤ること(が何度もあつた。)
- 4 くわしく
- 5 自ら経験を積み修行に励むこと

△解説▽

- 1 「父」とは「伊豆の船児某」のことである。直後から、この人物が「日和
見(天候を予測する人)」であつたことが分かる。
- 2 「妙」には「たいへんすぐれている」という意味がある。また、傍線部②
の直後に「上手なりて」とあるので、アが適当であることが分かる。この父
親は元々船頭であり、長年にわたり経験を積んできたので、正確に天候を予
測できるようになつたのである。
- 3 空所の直後に「何度もあつた」とあることから、「しかるに度々見損あり」
の部分の説明すればよいことが分かる。「伊豆の船児某」の子どもは父から
天候を予測する仕事を受け継いだものの、あまり修行をしておらず経験も積
んでいなかったため、何度となく天候の予測を外していたのである。
- 4 語中の「は・ひ・ふ・へ・ほ」「わ・い・う・え・お」に改めるので、「く
はしく」は「くわしく」となる。
- 5 【1】では子どもが日和見を何度となく外す理由(日和見の稽古をしない
理由)を「父親の地位や財産を譲り受け、生活が豊かだったことで、自然と
(天候を予測する)修行がおろそかになり、父親から伝承されたことだけに
頼つて自分で苦労することもなかったからだ」と述べている。このことから
「何かしらの技術を身に着けるには」みずからが苦労して修行に励むことが
大切である」ということを伝えようとしていることが分かる。ただし、問題

には「Ⅰ」と「Ⅱ」の内容をふまえて」とあるので、「Ⅱ」中の「その技術は個人の経験に基づく」という部分をうけて「(技術を身に着けるためには)経験を積むことが必要である」といった内容を解答に盛りこむ必要がある。

〈大意〉

將軍が徳川吉宗のころ、伊豆の船頭をしていたある男を呼び出し、この男を日和見(天候を予測する人)となさった。(この男は)三十年ほどのあいだ、天候を見誤ることが一度もなかった。この男の子どもは、父親の仕事を受け継ぎ、現在、日和見を務めている。しかし、この子は(父親と異なり)天候を見誤ることが何度もあった。父親は元々船頭で長年にわたり海の上を往来し、一生懸命天候を予測することを学んだ人だったので、自然と(天候の予測が)非常に巧みになって上手であった(のに対して)、子どもは父親の地位や財産を譲り受け、生活が豊かだったことで、自然と(天候を予測する)修行がおろそかになり、父親から伝承されたことだけに頼って自分で苦労することもなかった。(だから、このことが)細かなことに心をくだきながら(天候を予測する)稽古をしなかった原因となったのであろう。(このことは)武芸の家の者も、しっかりと心得ておくべきことである。

P 122
[8] R 4 年度

〈解答〉

1 一尺の唐糸

2 ついに

3 (少しの量だから) 何の役にも立たないだろう

4 工

5 (仁兵衛への褒美として) 三百石を与える (こと)

〈解説〉

1 「あの糸切れ」とは、「一尺ほどの唐糸」のことである。土井利勝の言葉の最後に「一尺の唐糸」とある。

2 語頭がない「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に改める。よって「つひに」は「ついに」になる。

3 直後に「ちりとなして捨つる(ごみとして捨てる)」とあるので、なぜそのように判断したのかを考える。1行目に「あの糸切れが何の用に立つべきや(あの糸切れが何かの役に立つはずはない)」とある。

4 (1) 7〜8行目に「さやうの辛苦にて出来しものを…捨つるは天罰おそるべきことなり(このように並々ならない苦労のすえにできたものを…捨てることは天罰が下るのを恐れるべきことである)」とある。この部分にあう選択肢は工である。

(2) B の直前にある「仁兵衛への褒美として」に注目する。2〜3行目に「仁兵衛に三百石を取らすべし(仁兵衛に三百石を与えよう)」とある。

〈大意〉

「これを見なさい。私をけちな人と呼び、あの一尺ほどの唐糸が何かの役に立つはずがないと(言って)笑う者も多い中、(その糸切れを)大切に持っていたことは大変すばらしいことである。(だから、糸切れを大切に持っていた)仁兵衛に三百石を与えよう。さて、この糸切れが大切である理由を語って聞かせよう。この糸は元々中国の民が(蚕の餌である)桑を取り、蚕を飼い(その蚕の繭で)糸をつくり、(その糸が)商人に渡り、長い航海を経て我が国へ渡り、

(渡ってきた糸を) 長崎の町人が大事に扱い、(それを) 京都、大阪の商人が買い取り、ようやく江戸に行き着いたものである、その大変さはどれほどのものであったかと思う。このように(様々な人々の) 並々ならない苦労のすえにできたものを、少しの量だから(役に立たないだろうと考えて) ごみとして捨てることは天罰が下るのを恐れるべき(くらい恐れおおい) ことである。今、下緒の先を結んだので、私は、(みなが役に立たないと言った) 一尺ほどしかない唐糸を三百石で買い取ったぞ」と言ったそうだ。

P 124 9 R 5 年度

△解答▽

1 おしえて

2 にかはせん

3 いま鳴く鳥

4 (1) 巢に帰る道に迷ったひなを呼ぶ親鳥

(2) 特定の鳥

△解説▽

1 「を」は「お」に改める。また、語頭にない「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に改める。よって「をしへて」は「おしえて」となる。

2 6行目に「と答へるにぞ、」とあるので、その直前の「何にかはせん」が「老婆」の言った言葉の最後の部分だとわかる。また、2行目の「むづかしき」といふ人かな」は、老婆が旅人を評して言った言葉である。

3 「この鳥のみをしへて、何にかはせん」という老婆の言葉は1行目の「いま鳴く鳥の梢は、いづこなりや、おのれにをしへてよ、」という旅人の言葉を受けたものである。このことから、「この鳥」とは、旅人の言う「いま鳴く鳥」のことだとわかる。

4 (1) 中村さんは「老婆は、……」A のことを呼子鳥と言うのだ……と説明している」と発言しているので、老婆の発言の中から A に対

応する部分を探す。4～5行目に「巢に帰らん道にまどふを、親

鳥の巢より呼ぶなるを」おしなべて、呼子鳥といふなれば(巢に帰る道

に迷ったひなを、親鳥で巢から呼ぶ鳥のことをすべて、呼子鳥と言

うので)」とある。

4 (2) 4 (1)にもあるように、「呼子鳥」とは「ひなを呼ぶ親鳥」のことである。

しかし、旅人は「呼子鳥」を「鳥の種類の一つ」と考えていたので『呼子鳥』はどこにいるのか」と尋ねたのである。

△大意▽

(旅人が)「いま鳴いている鳥(呼子鳥)がいる梢はどこか。私に(その場所を) 教えてくれ。(呼子鳥の) 姿を見て心にとめておき、友へのみやげ話として、(その鳥のことを友人に) 話そう」と(鳥の居場所を教えてくれるように) 求めたところ、老婆は「めんどうなことを言う人だな。すべての鳥のひなが飛ぶ練習に(巢)を出て(その練習をしつつ)、あちらこちらえさを探し求める(ひなの) 様子が頼りなくて、親鳥で巢に帰る道に迷ったひなを呼ぶ鳥のことをすべて呼子鳥と言うので、いま鳴いている鳥(が何という名前の鳥か) のみ教えることに何の意味があるだろうか、いや、ないだろう」と答えたので、(旅人は) はじめて呼子鳥がある特定の鳥(を指すわけ) ではなかったのだと、わかった。

△解答▽

1 かいて

2 ②ア ③ウ

3 「みみづく」を「づく」と省略することで、言葉の短くしようとしたのに、説明のために、かえって文が長くなった点。

4 オ

△解説▽

1 語頭がない「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」になおして読む。よって、「かひて」は「かいて」となる。

2 この文章の登場人物は「ある人」と「友達」の二人である。「みみづく」を囫にして鳥を捕まえたのは「ある人」、その人に「『みみづく』を貸してほしい」という旨の手紙を書いたのは「友人」である。

3 傍線④の直前にある「それならばはじめより「みみづく」と書けかし」の「それ」の指す内容に注目して滑稽な点を説明するとよい。「友達」は手紙に書く文字数を少なくするために「づく」と書いたものの、その説明を書いたために、かえって手紙の文が長くなったのである。傍線④の直後で著者はこの手紙について「文字をつづめんとして、多くの文字を添へ、詞を短くせんとして、かえりて長くなる事をしらず」と述べている。

4 「このたぐひのはなし」とは、「(友達が手紙を書くのに、)言葉を減らそうとしたが、その説明のためにかえって手紙の文が長くなってしまった」ことを指している。このような意味を持つのは「裏目に出る」である。なお、「一石を投ずる」は「反響を呼ぶような問題を投げかける」、「水をさす」は「うまくいっていることをわきから邪魔をする」、「しのぎを削る」は「相手に負けまいと激しく争う」、「恩を仇で返す」は「恩のある人に対して、恩返しではなく、かえって害するようなことをする」という意味である。

△大意▽

ある人は、みみづくを飼っていて、それを囫にして鳥を捕まえていたところ、同じように狩りをする友達から、みみづくを借りに(手紙が)送ってきたのだ

が、その手紙には「みみづく」の「みみ」を省略して、「づく」と書いてあり、手紙の終わりに「づく」とは「みみづく」のことである。「みみづく」と書けば、文字数が多くなり言葉が長くなるので、「づく」と書く」と、長々と説明してあった。それならば最初から「みみづく」と書けよと(この手紙を)滑稽に思う。文字を縮めようとして(その説明に)多くの文字を書いたことで、言葉の短くしようとして、かえって文が長くなってしまったことに気づいていない。世間の(さまざま)事柄を見ると、これと同じような事が多い。

標準解答

合 計	⑤								④		
	4	3	2	1	5	4	3		2	1	
50 点	(計 8点)	3 点	2 点	1 点	2 点	(計 10点)	3 点	2 点	1 点	(計 16点)	
	ウ すえて 老いたる猿 老いた猿を思いやる猿たちの姿に感動して、 早く親に会いたいと思ったから。						オ (玲於奈が誘っても入部しなかったのに、) 瑛 太郎が現れた途端に入部した基を、玲於奈は 快く思っていないかったこと。 八つ当たり エ すれ違いがあったが、二人の目標が同じであ ることを再確認して安心したから。			○内容 自分が目指している、あるいは夢見ている 世界について、目指している世界、あるいは 夢見ている世界を実現するために必要なこと にふれながら明確に書いている。 ○表現 文脈に即して語句が適切に使われており、 内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わか りやすい文章になっている。 ○表記 漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切 に使われている。	

解説

1 「見える」に「ない」をつけると「見えない」となる。「ない」の直前が工段音に変化したので、「見える」は下一段活用だとわかる。また、「見える」の直後に「虹」という名詞があることから、「見える」は連体形だとわかる。

3 問題文にもあるように、「楷書とは筆順が異なる」漢字を選ぶ。「荷」の部首であるくさかんむりは、行書体と楷書体で筆順が異なる部首である。

4 「毎年」は「マイとし」と読む言葉で、「毎」は音読み、「年」は訓読みである。アオの言葉の読み方は次のとおりである。なお、カタカナは音読みを、ひらがなは訓読みを表している。

ア 円高（エン だか） イ 煙突（エン トツ） ウ 困惑（コン ワク）
エ 出口（で ぐち） オ 野宿（の ジュク）

5 「きらきらと」は活用がなく、後にある「光る」という動詞を修飾しているので、副詞だとわかる。なお、副詞は自立語で活用がなく、主に連用修飾語になる単語である。

2 1 [] の直前にある「1」で○をつけた地域の魅力とは」に注目すると、【永田さんのアドバイス】は、「地域の魅力を教えてください」だけでは、2の質問は、1の質問と別の質問だと回答者が誤解するのではないかという内容だということに気づける。よって、[] には、「別の」等の言葉が入る。

2 [] の直前にある「日本の農業は高齢化の進行や農地の荒廃があつて」から、「決して[]とは言えない」は日本の農業がうまくいっていないことを表現したとばだとわかる。また、直後に「言えない」という否定表現があることから、[] にはうまくいっているという意味を持つ語が入ることがわかる。これらの条件にあうのは「順風満帆」である。なお、「順風満帆」は物事が順調に進むことである。

3 [] の直前にある「資料1」を見てもらえるかな、全国と比べ、熊本県の特徴は」や、あとの今村さんの発言中にある「だから、地元野菜をおいしく食べてもらうために…」に注目する。【資料1】を見ると、熊本県の農業出荷額に占める野菜の割合が、全国のそれより高いことがわ

かる。

4 直前の「地産地消が進むとフード・マイレージの値は」に注目する。「地産地消」とは「ある地域で生産された様々な生産物や資源をその地域で消費すること」である。また、【資料2】に「フード・マイレージ」食料の輸送量×輸送距離」にも注目する。これらのことから考えると、地産地消を推進すると「食料の輸送距離」は短くなるので、もし、輸送量が同じであれば、フード・マイレージの値は「小さくなる」はずである。

5 傍線⑤の言う「共通点」とは、「石積みの話」と「地産地消の推進」の共通点である。佐藤さんの「環境に配慮した地産地消」、今村さんの「環境に与える影響を示すフード・マイレージ：地産地消の推進に活用できそうだ」、【資料3】中の「石積みは環境に負荷をかけない」から、ここで言う共通点とは「環境に負荷を減らす（環境に配慮する）」という点だとわかる。

3 1 I 的な研究」とは「純粋にその動物を知りたくてやる研究」のことである。このことから、研究Aは、第1段落に登場する「基礎的な研究」のことだとわかる。

II 的な研究」とは「その場その場で応急措置的に効果を出す研究」であり、「速報性を重視し、現実化を目指して」いる人たちが行う研究である。また、II に起きている問題」とも重ねて考えると、II には「現実」が入ることがわかる。

2 脱論文の最初にある「大人になって」や「職」に注目して、元の位置を特定する。（イ）の直前に「職にあった三十数年」、「子どもや学生のころから」などの表現がある。

3 「ある生徒」は「ヨーロッパと日本における、野生動物と人との関係の違い」についてまとめている。よって、ヨーロッパと日本の対比に注目して、解答を作成するようにする。

A A に入るのはヨーロッパにおける野生動物と人との関係である。第4段落に「人々も野鳥の存在を認め、…必要以上に干渉しない」、第6段落に「公園や学校などの緑地にいる身近で害のない動物たちとの距離感」は、ヨーロッパで見た少し緩やかで穏やかな感じよいのではないかとあ

る。要するに、ヨーロッパにおける二者の関係は「おたがいの存在を認めあうような穏やかな」関係なのである。

B **B**に入るのは日本における野生動物と人との関係である。第5段落に「私たちは野生動物から敵愾心を感じ取り、おたがいの間に緊張感が生じる」とある。

4 筆者は「リスはリスで、人は人でそれぞれの目的に応じてキャンパスで生活・活動している。このくらいの距離感が、リスにとつても人にとつても心地よいのでは、と思う」と述べている。この部分を受けた内容になっている選択肢は才しかない。なお、イの「干渉をなくした方がよい」は、第4段落の「必要以上に干渉しない」とは異なる表現である。また、エの「野生動物と人との間に生じるさまざまな問題」は文章中に登場しない。

5 【採点の観点】

○ 内容

自分が目指している、あるいは夢見ている世界について、目指している世界、あるいは夢見ている世界を実現するために必要なことにふれながら明確に書かれている。

○ 表現

文脈に即して語句が適切に使われており、内容の述べ方や表現の仕方が工夫され、わかりやすい文章になっている。

○ 表記

漢字や仮名づかいが正しく、句読点が適切に使われている。

△ 解答例

私が目指している世界は、私たちがお互いに優しく合える世界です。普段、私たちは小さなことに怒ったり、不満に感じたり、相手をうらやんだりしています。このようなことが積み重なっていくと、他人との関係が悪化し、互いの気持ちが離れていくことになります。だから、私は寛容さを大切にして、いつでも機嫌よく人に接することが必要だと思います。

4 1 「そこに」① 入って行くわけにもいかなかった」は、基が玲於奈と話せなかった理由である。「すかずかと」は遠慮なしに近寄ったり入ったりする様子を表す言葉である。瑛太郎先生に抗議しようと持ちかけている

三年生が玲於奈の周りにいることに気づいた基は、彼女と話すのをためらったのである。なお、三年生が抗議しなかったのは、玲於奈に代わって基が部長になったことである。

2 「千学で吹奏楽やろうって（玲於奈が）誘ってくれたのに、拒否していたから」「瑛太郎先生が現れた瞬間、ころっと入部したから」などに注目する。長い間、玲於奈の吹奏楽部入部の誘いを断ってきた基が、瑛太郎先生が指導者として戻ってきたとたんに入部したことを、彼女は快く思っていなかったのである。そして、そのことに基は気づいていたのである。

3 玲於奈の「うるさい。ちよつとくらい八つ当たりさせてよ」に注目する。2の解説にもあるように、玲於奈は、基が吹奏楽部に入部したことについて思うところがあったのである。「八つ当たり」は自分の不機嫌な気持ちや怒りを関係のない人にぶつけることである。

4 傍線④とその直前にある「嫌だよ：その人から部長をやれつと言われて投げ出せるはずがない」という基の発言に注目する。基はこのように言った瞬間、部長でなくなった玲於奈の心境を慮ったのである。このことを説明している選択肢はエである。なお、才は「自分の気持ちはどうなのか疑念を抱き始めた」の部分が間違いである。

5 基と玲於奈が「どちらともなく吐息をつくように笑った」理由を、このときの二人の心情とあわせて答える。また、それまでのあらすじをふまえて解答をつくるようにする。2、3、4の解説にもあるように、この場面の前半では、この二人の関係は少しぎくしくしていたことがわかる。しかし、「全日本コンクールに出場する」ことが二人に共通する目標だということを確認した基と玲於奈は、「吐息をつくように笑った」のである。「吐息」はがっかりしたり、ほっとしたりしたときにつく息（ため息）のことです。ここでは二人が「ほっとした」様子であることを表現している。

5 1 問題文にある「その場の状況の説明」にあたる部分は、「猿ども集まっていたが中に、藤かづらやうの物にて編みたる畚をすゑて、かはるかはるたちより、木の实などあたへなぐさむるさまなり（＝猿が集まっている中に、藤のつるのようなもので編んだかごに、代わる代わる木の实などを入れ慰勞している様子であった）」である。この部分を説明している選択肢はウで

ある。

2 「ゑ」は「え」と読むので、「すゑて」は「すえて」となる。

3 傍線③の直前の「子ども」は「猿」のことであり、また、直後の「つかふる」は「仕ふる」と書く。要は、若い猿が年老いた猿に仕えている（子どもが世話をしている）のである。よって、「これ」は「老いたる猿」を指している。

4 問題文にもあるように、帰りを急ぐ気持ちになった理由とそのきっかけを答える。傍線④の直前に「みづからも親持ちたれば、ことさらに感じて（＝自分にも存命の親がいるため、（その様子に）ひどく感動し）」とある。この部分が「帰りを急ぐ気持ち」になったきっかけである。また、ここでの「帰る」は「親元に帰る」という意味である。よって、「帰りを急ぐ気持ち」になったのは、若い猿が年老いた猿に奉仕している姿を見た児島尚善が、自分も早く親に会いたいと思ったからである。

△大意▽

児島尚善が語られたことだが、「京都から丹波を経て、播磨に帰る山中で、向かっている先の所がざわざわとしていたので『何だろうか』と思って見てみると、猿が集まっている中に、藤のつるのようなもので編んだかごが置いてあり、それに代わる代わる木の実などを入れ慰労している様子であった。その内の方に、年老いた猿がちらっと見えた。（尚善は）若い猿たちが年老いた猿を世話していることに尚善はふと気づいて、自分にも存命の親がいるため、（その様子に）ひどく感動し、帰り道をさらに急がずにはいられなかった」そうだ。